

■作詩者

作詩者はレジナルド・ヒーバー(Reginald Heber 、1783-1826)、英国国教会の牧師です。彼は、I . ウォッツ、C . ウェスレー、J . モントゴメリー、H . ボナーの四人と共に英国の五大讚美歌作者といわれています。彼が書いた凡そ 300 編の讚美歌の多くが現在も歌われ、「聖なる聖なる聖なるかな」(讚美歌 66 番) は世界で親しまれています。

なお、この讚美歌「Brightest and best of the sons of the morning」に関する優秀かつ興味深い論文がこちら【↓】に掲載されています。ブラウザの標準機能を使えば、全文を日本語で読めます。

<https://www.hymnologyarchive.com/brightest-and-best>

■作詩者ヒーバー(1783-1826)が生まれる直前のイギリス

1640 ~ 1660 年、ピューリタン革命

1688 ~ 1689 年、名誉革命

1707 年、イングランド王国、スコットランド王国が合同し、グレート・ブリテン連合王国に

18 世紀、イギリス東インド会社がインド植民地支配の機構として全盛期を迎えて繁栄(1858 年解散)。

19 世紀頃から 20 世紀初頭まで、「パクス・ブリタニカ」の時代(イギリス帝国が世界的な覇権国家)

1744 年、メソジスト運動の第1回年會が開催さる。18 世紀のイギリスで J . ウェスレーを指導者として起こった信仰復興運動。当時の英国国教会の形骸化した儀式や教理に対して自らの神の恵みの体験を重んじ、愛と奉仕による社会事業、教育活動に挺身し、労働者の自覚と向上を促した。

1760 年頃～、産業革命がすすむ。

1776 年、アメリカ13州が独立。イギリス、植民地アメリカを失う。

■作詩者ヒーバーの生涯

1783 年、イングランド北西部チェシャー州のマルハスで、父親がその国教会の牧師であり大地主である裕福な家庭に誕生。彼は 7 歳までにラテン語の古典詩を英語に翻訳し、17 歳でオックスフォード大学に入学、在学中に詩で 2 つの賞を受賞した。彼は富と知性に恵まれたその一方で、心の優しさについて「貧しい人を見るとすぐ自分の財布からお金を出して与えるので、親が彼に小遣い金をわたすときは、それをポケットに縫い付けた」との逸話が残る。

1805 年、大学卒業後、ナポレオン戦争を避けて、親友とロシアのサンクトペテルブルグ、コーカサス地方などを旅行。これが彼を「島国イギリスの人間」から「国際人」に変えたと言われる。

1807 年、イングランド西部のシュルーズベリー近郊のホドネット村にある父親の教会の牧師となり、16 年間そこに留まる。そこも彼の父が地主であったことから、そこで安泰な生涯を送り得たが彼は違っていた。

1809 年、アメリアと結婚。彼女は彼の日常生活をこう述べた。「一日の七、八時間を読書、瞑想、祈りに費やしており、壁にアジアやアフリカの地図をはって、世界の果てにまでキリストの救いが宣べ伝えられることを真剣に祈っていた」と。

ところで当時の英国国教会の礼拝は、祈祷書と教会暦により規制され、歌うことしか許されたのは詩編だけであった。その一方で、ジョン・ウェスレー(1703-1791)、および弟チャールズ(1707-1788 、*1)を中心として展開されたメソジスト運動では、弟が次々に作る讚美歌が歌われ、人々の魂を潤していた。

また、ヒーバーは、「アメイジング・グレイス」を作詞(1779 年)したジョン・ニュートン(1725-1807)と友人のウィリ

アム・クーパーが編纂した『オルニー讃美歌集 (Olney Hymns) 』に強い関心を持っていたと言われる。

*1 チャールズ・ウェスレーと現行讃美歌(一部を抜粋)

1735年9月、英国国教会司祭に叙階	1738年5月21日に福音派に改宗
1739年、98番「天(あめ)には栄え」	1740年、273「わがたましいを」
1747年、352「あめなるよろこび」	1749年、248「ペテロのごとく」

1811年、ヒーバーは、ウェスレーの讃美歌は国教会の礼拝形式には不向きと判断し、まず顕現日(*2)(ラテン語で Epiphany、公現日とも言う)と呼ばれる一月六日のために書いた讃美歌「Brightest and best of the sons of the morning」が雑誌「christians observer」に掲載された。

*2 教会暦で、東方の博士たちがベツレヘムに誕生したキリストを訪問(マタイによる福音書 2:1-11)し、キリストが神の子として公に現れたことを記念する日。

しかし、讃美歌として公になったのは彼の死後であった。

1820年、彼は自分の讃美歌集の出版を願い出たが、カンタベリー大主教の許可を得られず。

1823年、彼の祈りは主に聞かれ、カルカッタ司教に。

1826年、「聖なる聖なる聖なるかな」(讃美歌 66 番)を作詩

同年、ヒーバーはインドの人々のために献身的に働いていたが、高温多湿の気候と、広くインド、セイロン、オーストラリアを監督する激務からくる心労のために健康を害し、ある日曜日の朝、大勢のインド人への説教の最中に日射病となり、これがもとでカルカッタに赴任後僅か三年、43歳で世を去った。

■歌詞とメロディーとの出会い

1827年、ヒーバーの讃美歌集の刊行許可をようやく与えられ、未亡人が友人たちと共に彼の作品から 57 首を選んで『Hymns Written and Adapted to the Weekly Church Service of the Year』を出版。その後 20 人ほどの作曲家たちがこの詩のための曲を書いた。

1848年、ジョセフ・フランシス・スラップ (J. F. Thrupp、1827年 - 1867年)、「EPIPHANY HYMN」作曲

1892年、ジョン・ハーディング(*3)(John P. Harding、1850-1911)、「MORNING STAR」作曲、これが讃美歌 118 番のメロディーに。なお、現行讃美歌への訳者は不明。

*3 ジョン・ハーディングはロンドンの聖アンドリュー教会で聖歌隊指揮者及びオルガニストとして 35 年務め、多くの教会音楽を作曲した。残念なことに、彼は公務員として貧しい人々の物質的・精神的な福祉向上を図る仕事に従事していたこと以外は殆ど知られていない。

■参考文献、Web

大塚野百合『「きよしこのよる」ものがたり』、教文館、2015/11/20 P.147ff

梅染信夫『栄光、神にあれ 讃美歌物語』、新教出版社、P.25f

<https://www.hymnologyarchive.com/brightest-and-best>